上毛新聞

川の子ども新聞

2003
夏号

ぼくは利根川の
水の精「ポトム」。
利根川の源流でポトンと落ちた
1滴の水から生まれたんだ。
ぼくといっしょに、
川と水のことを
学んでみよう。

●もくじ

P1　川にまつわる話
P2-3　夏休み自由研究ガイド
P4-5　川・ダムの資料館めぐり
P6-7　ダム統管ってなあに？
P8　ポトムの楽校

この夏、川と友だち。

この夏、川が呼んでいる。
もっとふれて、もっと知って…
川は、いのち。川は、やすらぎ。
ふれあえば、きっと、川は友だち。

湯の小屋沢川（水上町藤原）

川にまつわる話―③

板橋　春夫

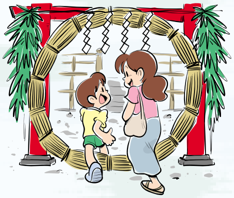
◆恵みの雷雨

雷の多い群馬県は、雷にまつわる伝承が豊富です。雷はライサマと敬称で呼ばれ、人々は雷が落ちないまじないに「遠くのクワバラ、クワバラ（桑原、桑原）」と唱えました。桑原とは、蚕の食べる桑を植えた畑のことです。

県内には、雷が多い気候風土を反映し、雷電神社がたくさんあります。邑楽郡板倉町の雷電神社はそれらの本社にあたり、古くから信仰の対象とされてきました。

◆板倉町雷電神社の茅の輪くぐり

この雷電神社で毎年七月三十一日に茅の輪くぐりが行われます。境内の御手洗沼に生えているマコモを刈って鳥居に大蛇の形を模した茅の輪を飾り付けます。



氏子たちは、神社から受けたヒトガタ（人形）を持ち、茅の輪をくぐります。この紙片に罪けがれを託し、川に流して健康であることを祈ります。翌日、茅の輪を利根川へ流すと、細長く一本になり、まるで大蛇が川を泳ぐようであったそうです。

茅の輪が途中でつかえず下流へ流れるのがよいとされ、途中でつかえるとその場所は流行病や日照りがあると恐れられました。近年は利根川の流量も減り自然環境にも配慮した結果、茅の輪を川へ流さなくなりました。

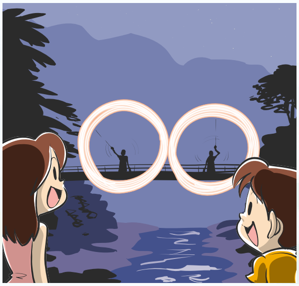
◆渋川市半田のみそぎ流し

渋川市半田のみそぎ流しも七月三十一日、国道十七号の坂東橋下の河原で行われます。カワラハギと呼ばれる草とカヤを用いてアーチ状に作ります。このアーチをくぐって夏の疫病よけとしました。ヒトガタ（人形）で身体をなでたり、息を吹きかけたりして川へ流しました。「三尺流れれば清まる」といわれるように流れる川には浄化力があり、このみそぎ流しは水の浄化力を利用したものといえます。

◆南牧村大日向の火とぼし

甘楽郡南牧村大日向の火とぼしは、八月十四、十五の両日行われます。南牧川をはさんで両岸に密集している集落の南山の中腹に火とぼし山があり、カヤを束ねた大たいまつに点火し、その火を移した小さなたいまつを子どもたちが振りながら下りてきます。盆の精霊を山から家々に迎える古い形の行事です。

この行事の見どころは、河原でつづみ状に束ねたたいまつに火をつけてぐるぐると振り回す場面です。まさに南牧川の夜空に映える火の祭典と言えます。これで家々にお盆さまがやってくるのです。



□参考文献…『全集写真探訪ぐんま5（祭りと郷土芸能）』（上毛新聞社・一九八四年）、『祭礼行事・群馬県』（おうふう・一九九六年）

板橋春夫（いたばし・はるお）
一九五四年生まれ。群馬歴史民俗研究会代表。近著に『葬儀と墓の現在―民俗の変容―』（共著・吉川弘文館、二〇〇二年）、『暮らしの中の民俗学』第一巻（共著・吉川弘文館、二〇〇三年）がある。